

# 虹と日本文藝 (八)

— 比較研究資料・通考 —

荻野恭茂

## 通考

以上で、ひとまず、海外の、おおむね古代における〔虹〕資料涉獵の旅を終る。よって、ここで、その成果たる〔虹〕資料〔Ⅱ〕〔37〕について、その微視的なものは、各資料の私註中の〔考〕に譲り、巨視的見地から、通覧・考察してみると、おおよそ次のごとく要約できるものと思う。

## □ 一次的認識

〔三ジⅡ虹〕の原初的・根元的認識は、地球上の、地域地域におけるそれぞれの素朴な日常生活中における体験の重要性和、その形状の囁目との関わりにおける強弱によって異なっていたようである。従ってその認識はこれよりの発想と深く結びついていたものと思われる。

- ① 「蛇」 系 (天蛇・水蛇・地下蛇型) …… 多く遊牧・農耕民族
- ② 「弓・弧」 系 (天弓・雨弓・神弓型) …… 多く狩獵民族
- ③ 「貝・蟹」 系 (天の大貝・甲蟹型) …… 多く海洋民族
- ④ 「繩」 系 (天の蓄繩型) …… 東アジア遊牧民族
- ⑤ 「吐息」 系 (蝦蟇の吐息型) …… 湖沼辺住民族
- ⑥ 「小便」 系 (雌狐の小便型) …… アルタイ系 (フクリヤイト族)
- ⑦ その他

①の場合には、単なる気象現象としてではなく、原始アニミズムの発動としての、生物的、特に「動物的いのち」それも「蛇」類のいのちを内蔵しているものである。これは後代における「見立て」以前の時点における実感的享受よりの認識なのであり、それに基いて発想されているものである。

そしてこれは、ニコライ・ネフスキーの調査を初めとして、その後の調査によると、かなり大きな比率を保有しつつ、グローバルに広在していたもののように、おおむね「雨」「水」と密接に関係し、人力を越えた神靈的性格を有する水靈性を内蔵する動物の要素が濃い。太古・爬虫類、後にいう恐龍時代の哺乳類の恐怖体験の深層心理と共に、当然、畏怖の念がまつわっている。アジア民族を中心に、アメリカインディアン(Ⅱ25)などに見られる「虹指差禁忌」民俗もその名残りであろう。

「天蛇」型の場合、その棲息する場所は、「天上」(天界)であり、それが「地上」の水中(海・湖沼・滝つぼ・堰等)に飲水のために天降るわけであるが、そこに渡り鳥の越冬のごとくとどまっている場合、一見、その住人・主のごとく受け取られる場合もある。アメリカインディアン等に見られた(Ⅱ25)「水蛇」型がそれであろう。また、これ(天蛇型)とは発想が真反対のもの、すなわち、上―下、天―地、の関係が逆の「地下蛇」(Ⅱ35)も見られた。アフリカ・インド・オーストラリアに著しい。

その属性の一つとして、水を好み天―地の間を自由自在に往き来する超能力を有している。すなわち、いずれの場合も、壮大な天―地の空間を支配下に置き、氣象現象さえも統御しているのである。

また、稲光りを発しつつ、大音響を伴って現出し、逆に雨水をもたらす―飲んで溜め込んだ水の放出か?―場合もある。ここには、稲光り≠火≠蛇の赤い舌、の連想も見られる。

(虹)を動物的存在と観ずれば、当然そこには、  
雌雄

を有することになる。この点は東洋、特に中国において、すこぶる顕著に残存しており、西洋においてはおおむね稀薄である。西洋に

おいても、もとは存在していたものであろうが、後に興った強大な宗教文化の影響により、その動物性の問題をも含め、かなり早い時期に、表面的には消滅または隠蔽されていたようである。「虹の下をくぐれば性が変わる」(Ⅱ34)などが、そのかすかな残片であろう。しかし、内在的に見ると、後述の二次的認識たる

「財宝」や「橋」との関係  
などに、形を変えて遺伝しているものと思われる。

また、蛇類であるから、その属性として、当然「雌雄淫着性の気の濃厚」な存在として享受され、そこより

濃艶なエロチシズムの揺曳

を感じていた。この「雌雄淫着性の気の濃厚」という属性の囁きは(虹)の属性と重なり、(中国では陰陽思想と結びついたが)有難い「産出」性を人類に強くイメージさせたことであろう。これがもたらす「雨水」はその最たるもので、(虹)の致福能力の究極的淵源がまさにここにある。かてて加えて蛇類には摩訶不思議な「脱皮再生」能力も見え、消えてはたつ(虹)の「再現」の囁目と重なる。そしてそれは古代の人類にとつて「畏怖」と「強い憧憬」の混融したものであつたはずである。

蛇類の生存について見ると、約二億年前に恐龍の先祖とされるリストロサウルスという爬虫類が南極大陸にいた。(化石の出土)しかし、これは勿論人類誕生前のことである。人類誕生後について見ると、この南極圏を除き、北極圏を含めほぼグローバルに生存していたようで、囁目の可能性は広い。そのうち、(A)系は、より縁の深い遊牧・農耕民族がかかわっていたものと思われる。

(B)の場合は、狩猟を生活の中核においた民族の発想によるものである。(ただし、狩猟生活をしながらも、(A)の「蛇」系が既にその

始原としてあり、それがあまりにも強烈な場合は、この③「弓」系の発想は生まれ得ない。逆に弱い場合は、④を駆逐する場合もあろう。狩猟生活自身、原初的パターンの一つであり、その狩猟のための重要な道具としての「弓」の囁目により発想され、陽光・雨等を支配する天帝または天神・雷神の弓と観じたもので、時間的には④よりはやや新しかろう。というのは原初的とはいえ「弓」という道具、素朴ながらも文化的所産の現出以後に関わるものであり、幾分は見立て的要素も混入している可能性もある。始原は単なる（天神）（雷雨）として現れるが、それにはやや自然神的な素朴な天神・雷神等、いくらか宗教くさい享受の面もまわっている場合もあるからである。繰り返しになるが、この「弓」系発想は、自然的生物たる「蛇」系発想とは対極的というか、敵対関係に立つ場合もある。即ち、洪水・旱魃等、大切な雨水の調節を乱す魔物（天にいる毒蛇・悪龍の類―この場合は当然（虹）と同一視されていない―②①―（25）①並に〔考〕）を射滅ぼしてくれる、神威ある（天帝の弓）（②⑧並に〔考〕）と観じているふしもあるからである。

ロマンス語派に顕著な「弧」系も、おおむね「弓」系と同様環境よりの発想であろう。

③の場合は、海洋民族のもので、そのうち「貝」系は、さくら貝状の大貝の囁目によったものである。メラネシアのパラオ語（Tokelau）がこれにあたる。ミクロネシアのプロアナ語（Talei）も同類であろう。ヤップ語（Tapei）も、④と並列的に存し原初的なものである。④「蟹」系は、「甲蟹」（②⑩―（d）（e））があり、中国南部の海に面する地方の囁目か、同質の地方よりの中国への伝播による。

⑤の場合は、遊牧民族の一部（トルコ系蒙古人②②参照）に見られ

るもので、牧畜・家畜等を結びつけておく「繩」の囁目より発想せられたもので、それを天上界（高天原？）に夢想してみたものである。

⑥の場合は、湖沼辺民族の囁目よりの発想であろう。中国古来よりの民俗たる、「白氣を威勢よく吐く月中の蟾蜍」（②⑫）とも何らかの関わりがあろう。（※（虹）を水中の龍蛇の吐く息とする日本の俗信《安間論文》とも通う。）

Fの場合は、アルタイ系の、ヤクト族や日本人の一つのルーツともいわれるバイカル湖周辺のブリヤート族に見られるものである。資料②②・②③参照。

## 二 二次的認識

一次的認識の上に、文化的要素―体系的宗教・神話等―が加味された、いわば発展的認識をいう。これには、

(イ) 形状的認識よりの発展 と

(ロ) 形状的認識よりの発展  
がある、形状的認識の中には、（虹）を論ずるのに大切なフアクターたる色彩的面も含む。

(イ)

主として④系すなわち蛇系の場合にそれが見られる。囁目される地方によって、それぞれの文化に影響され、さまざまの禁忌（タブー）がみられたが、それらを透過・変容した彼方に見られるものである。「天蛇」・「水蛇」「地下蛇」としての（三ジ）の変容・発展

である。日本文藝に關係の深い東洋についてみると、次の甲・乙のパターンがみられるが、その性状的共通項は、「異界の主で飛行自在、神靈的パワーを有する水靈的存在で、致福能力も有する」ということである。

東洋を主とした（ニジ）は、おおむね次のように分類される。これには変身現象をも含めている。

甲類（虹 $\parallel$ ♀）↓龍（王） 昇天↑地中・水中 海中 $\parallel$ 龍宮

（蛭 $\parallel$ ♀）↓龍女（乙姫）

乙類（虹 $\parallel$ ♂）↓美男↑天人 $\circ$ ↑天使 ↓天降る

（蛭 $\parallel$ ♀）↓美女↑天女  $\parallel$ 天使 ↓天降る

丙類（虹 $\parallel$ ♂）↓龍の性状的風貌をもつ虹 $\parallel$ 荒ぶる天蛇

甲類は、時経て空想の世界でデフォルメされつつ藝術的造型がなされたものであるが、それは、（ニジ）が「雷<sup>レイ</sup>・電光」（イナズマ）とセントにされて認識され、なお原始的動物性（□―⊙）をも残存させているものである。「電光」（イナズマ）の氣象現象は「蛇」類のもつ火を吹くような舌の動きと重ね合わせてイメージされたものであろう。そして神威的パワーの保持者である。これには中国型<sup>（註1）</sup>、モンゴル型、インド型<sup>（註2）</sup>、南洋型、等いろいろあり微視的にみればやや差異がみられるが、おおむね「たま $\parallel$ 靈力」を抱き地中または水中・海中（龍宮）を棲家として、時に「登龍」すなわち雲を呼び飛行昇天して雨水をもたらす。備翼がないのが普通であるが西洋のドラゴンのごとくあるものもある。

乙類は、（ニジ）が、甲類と「雨水」の問題等で關係は持ちつつも、比較的独立して認識されて藝術的造型がなされたものであろう。「虹蛭―郭注爾雅曰俗名美人」（ $\parallel$ 10）とあり、これを性別に仕分ければ「美男」・「美女」となる。さらに天界の住人（神）となる。（首陽山説話（ $\parallel$ 12中）のように、蛭を總称的に（虹）に含ませる場合もある。）よって、特に（蛭）の方は、その美しい多彩・淡彩の視覚イメージから、更らにそのような美しい「羽衣」をまとう「天女」となるのであり、これは、片やグローバルに散在していた「白鳥処女説話」と結びつきつつ形成されたものと思われる。大空に消えなるとして、きれぎれに残る淡く美しい（ニジ）のイメージは、これまた美しい羽衣をまとう天女の昇天の姿の幻想を生んだのであろう。

また、乙類の風貌は、氣象現象においては、オーロラと並んで最も美しいもの―魂を奪うような清艶・優美な存在―とされる（ニジ）をその淵源とするものであるから、当然、甲類の「豪快」性と違って、「清艶・優美」性にある。従ってこの世の外存在（変化者）のもつ、神秘的なまでの清らかに美しい、いわゆる「美男」・「美女」でなくてはならない。そしてこちらも何らかの神威的パワーを有し、人類に至福をもたらす存在である。

この「致福能力」は、甲類にもあるが、甲類は力が強大すぎて、時に「マイナス」的效果をあらわす場合がある。つまり、「プラス」「マイナス」両面があるが、乙類は発動すればおおむね「プラス面」である。乙類は擬人化が進んでいるから甲類より新型であらう。丙類は龍の本質<sup>（註3）</sup>を有するゆえ当然「マイナス」面も表れる。

形状面からみれば、次項の「（ロ）―a」型にも参入されよう。ただ、古代感覚では、天界は時に天海であり、方向こそ違え、同

様に「異界」である。よつて天上の「天女」も海中の「乙姫」も質的にはさして変らない。

かくて甲・乙類共、世界の文化・文藝的風土の中で、さまざまに生き生きと活躍することとなった。勿論、これらはその道程において互いに混交・混在・並列<sup>並列</sup>していることもあったのである。

電光・雷鳴・シャワーの後、虹の発現。「龍」が〈虹〉と時に混交・混在しつつ、その主たる属性たる「雨を呼ぶ、雨を放出する」性格の発露について考えてみる。

雨水というものは、遊牧民族であれ農耕民族であれ、はたまた海洋民族においてさえも、自らの生命体において、不可欠の極めて重要なものであることは、原初より経験的に認識されていたことであろう。とすれば、その「量」にこそ問題があつた。すなわち、その量が、

- (1) 正常・適正 か  
(2) 過多・過少 か

によつて、メリットとデメリットが生ずることとなる。

まず、(1)であれば、生命体全体に必須のこの上なく有難い恵みの雨、慈雨であり、畏怖の念を奥に蔵しながらも、感謝すべき素晴らしき存在として認識されたことであろう。すなわち、雨水が適当であれば、すべて生命体は存続し、繁栄することも可能となる。当然生産も促進されよう。これを象徴的に表現すれば、かの古代中国に頻出する「虹」が金を吐く「こととなり、いわゆる

〈虹〉吐金説話

となる。また、ギリシャ神話やケルト族に見られる、死者の靈魂を封じ込めて地下に埋葬しておく「金の壺」民俗が、彼界(天上界)

の交通手段たる〈虹〉の存在と結びついて、その境界たる〈虹〉との接点、すなわち「虹脚」を意識する。すなわち、「虹吐金の場所」  
|| 「金の壺埋葬場所」、と混融し、地球上いたる所に分布している、  
(|| 並びに私注参照)

〈虹〉脚埋宝説話

となつて行つたのであろう。それが拡大されると、財宝あるいは富との関連の民間信仰に発展する。そのうち、彼界—此界の中間的存在たる境界観念と結合すると、そこに、

〈虹〉と市

との関連も発生してくる。これが、財宝にとどまらず、敷衍されて精神的な価値としての「幸福」として享受されるとき、「ナイアガラで〈虹〉を見ると幸福になる」という様な素朴なものから、キリスト教やチベット密教に象徴される〈虹〉の発現をして最高のプラス価値として評価する文化となり、人々に、

瑞祥・至福感

として享受される。そしてこれを核に抱く文化・文藝等においては、

夢みるようなローマン的美意識

に結晶していく。(ただし、『旧約聖書』のノアの箱舟のあとにたつ〈虹〉の場合には、(1)(2)両面より抽象されつつ、しかるに(1)のプラス面の比率の大きい「苦難のあと希望の象徴」と解される。)しかし、(2)の場合には、「過多」となれば「洪水」となり、「過少」となれば、「旱天<sup>ひび</sup>」となつて、人畜・草木を苦しめ、生命体を脅かす。よつて「毒龍」と呼ばれたりもする。敷衍されて(中国では陰陽の乱れとしての)「天変地異」とも結びつけられ、

忌避すべきマイナスの存在

となる。「過少」の場合、これは原初的には、単に〈虹〉が水を飲み

干す—という素朴な享受から、それが神靈に観じられてくると、その「怒り」に起因するものと解し、その魂を慰撫せんとして、祭—等祭等種々の民俗行事—が盛んに行なわれる。特に、古代中国とその文化の影響を受けた地方では、かく怒りを和らげ、正常にする（適当な雨水をもたらしめる）雨水の調節者、治水者としての呪能（①（注6）参照）を有するものが、小さくは共同体の首長、大きくは天子である王、すなわち為政者であった。従って秀れた為政者たるためには、その能力を十分具備していなければならぬ。（古代中国では「虹旗」は天子の旗とされ、「龍車」は龍を支配する天子の車とされた。）その抛り所としての絶対的必要性から、呪能にかかわる神秘思想の一環として、陰陽・儒教思想と混融しつつ、

〈虹〉に関する占文化

が著しく発達した。『唐開元占經』〔論〕<sup>1</sup>に集約されているが、おむね《凶》である。下からは、「農諺」・「俚諺」等の形で発達した。これらは体験的なものである。よって、それぞれの地域的特性に根ざしたものであるから、当然、種々様々の形をとる。

（この適性願望の価値観は、かく生活体験の実感を踏まえつつ、中国などの「中庸」文化思想の一つのファクターに位置するものであろうか。）

②の場合は、形状的な面からすれば、本質的な変化は見られないが体系的な神話にとり入れられて、—素朴な自然神としての天神とか雷神とかの域を越えて—神話上の武神・英雄神の弓となる。すなわち、形状的な面での文化的威力・パワーに発展がみられるのである。（インドラ天の弓、イラン回教徒のラストムの弓、等。〔7〕参照）

③④⑤には、ヴァリエーションはあれど、さして発展的認識は見られない。

⑥には、朝鮮半島に「天女の沐浴の雫」の見立て（26）があるがそれと関係しようか。主体が、雌狐—天女、小便—沐浴の雫—と文化的に洗練されている。バイカル湖周辺の民と朝鮮半島の民との文化的交流が見られるわけである。

（ロ）

① 「イリス」

② 「舟」

③ 「橋」

④ 「啓示物」

⑤ 「輓」

⑥ 「衣服・服飾品」

（イ） 裳

（ロ） 帯

（ハ） 首飾り

（ニ） ヴェール

（ホ） 肩かけ

（ヘ） コートの縁・衣類の中紐

（ト） 水または雨の帽子

⑦ 「刀厄・兵乱象」

⑧ 「天女沐浴の雫」

⑨ 「梁」

⑩ 「旗」

その他

見立て型 移動主的

見立て型 移動物的

見立て型（有「逆見立て」型） 固定的

見立て型

見立て型

見立て型

（有「逆見立て」型）

（ハ）

（ニ）

（ホ）

（ヘ）

（ト）

見立て型

見立て型

逆見立て型

逆見立て型

(a)型 (a)1 (a)4) は、(A)系すなわち「蛇」系(天蛇・後の龍等)より発展したもので、内に性状・機能面たる、此界(地上界)―彼界(天界)の交通手段的能力を秘め、それに形状的な面の加わって発想され、「見立て」られたものである。

まず、(a)1の場合、「イリス」は、ギリシヤ神話『イリアス』における軽快俊足の虹の女神で不滅の神々の伝令使。天上―地・海上の間を自由自在に往復する。(31参照) ギリシヤ神話では神であつてもそれぞれに「人格」化されている。一次的認識の(A)系(天蛇・虹蛇系)の形状の発展としての文藝的扮飾が見られる。文化的に発達洗練はしているが、「移動の主体」である所に、その性状は内在し色濃く残存している。東洋の「天人・天女」型(乙類)も形状面からのみ見ればここに参入されよう。

(a)2の場合、その連想は、本質的には、くねりつつ水上を見事に滑るがごとく泳ぎ渡りゆく蛇類のもつ能力の囑目に支えられているものである。古代中国における仙界昇仙のための渡し舟たる「龍舟」(12)《注1》参照)や、ハワイなどポリネシア諸島に見られる「王の航海するカヌー(棹舟) || auanaa || (虹)」(33私注参照)等をいう。神話上、神の子孫である王の乗る舟であるから、当然、神界(彼界)との交通の具である。古代中国人の描いた死後の世界たる崑崙山へ昇仙も、本来海洋民族の信仰―海のかなたの常世の国・蓬莱の島山―であつたが、海に乏しい地方の民が、その信仰を享受して、大空を海と見立てて夢想したもので、その世界における「龍舟」であろう。(これも後に天帝の子たる天子の乗る舟を指すようになる。)台湾原住民に見られた「ハマゴオツトフ」―此界とアトハン(浄土)との虹の架け橋―やインドネシア・メラネシアの方面に広く分布している「橋」型の前段階と見てよからう。(27参照)

固定的でなく移動的、それも移動の具的であるのが特徴である。

次に、(a)3についてであるが、これは、ニューギニアの原始民等に見られる「蛇橋」、すなわち□―(A)系との間の過渡的なタイプを経て、文化性を帯びつつ発展・固定したものである。古代のある時期より、橋は大むね半円形(反り)を有しており、その囑目とも合致している。ほとんどグローバルに分布しているもので「見立て」としては最有力に位置する。天上―地上、彼界―此界、の壮大な空間に架かり、神霊・精霊・靈魂を、その主たる通行人としていた。二次的認識ゆえ、中国では、『詩経』(11)や『楚辞』(12)など極く古い資料には出てこない。唐代の詩には勿論出てくるが、「逆見立て型」、すなわち、「橋を(虹)に見立てる」型も出てくる。(例16)16参照)「渡し舟」的機能は同じであるが、(a)1(a)2が移動的であるのに反し固定的であるのが特徴である。

(a)4の場合、『旧約聖書』のノアの箱舟事件のあとにたつ(虹)に代表される。(29)啓示、すなわち神―人との間の精神的交流形態からみると、やはり(a)3の「橋」機能と同じ概念を共有する。すなわち、(a)3の更らに文化的に発展したものである。但し、この中に「至福」概念も含まれるので、一次認識中の、(A)―(+)面が遺伝している。

(b)の場合、フィンランドの神話『カレワラ』に見られるもので乗物の道具の形の囑目よりの見立てである。但し、「大空の輓」(32)となつている。

(c)の場合は、全体に多彩で美しい色彩のものに見立てられている。超能力を具備している場合もある。

(1)は中国の『楚辞』中(白霓裳(12)中)・白詩中(霓裳(16)中)等に見られる。天女の着す美しい裳もその発展であろう。現

実の世界に存する、例えば、高松塚古墳の壁画中の女人の着する、アコーデオンブリーツ様の色とりどりの装(Ⅱ16影印)や、日本で天孫系のお姫さまの着する十二単衣上の装は「逆見立て型」の名残りであろう。

(ロ)は、中国—(虹帯)(Ⅱ9私註中)や、北極圏エスキモーの詩(Ⅱ24中)などに見られる。(日本近世の西鶴や近松作品中に頻出する(虹の帯)はこの「逆見立て型」である。

(ハ)は、中東方面の神話中、女神・イシュタルの首飾りで、超能力も有している。(Ⅱ80中)

(ニ)は、イシュタルやマーヤー(Ⅱ30中)や、サロメ(Ⅱ「聖書」中)のものがある。

(ホ)は、エジプト神話中、イシスの7枚の肩掛け(Ⅱ80中)となつている。

(ヘ)は、シベリアのサモエド族に見られ、「ムンバノ Munbano」Ⅱ「太陽のコート」の縁と見立てる。(Ⅱ23) 同様の衣類の縁よりの発想が「七色虹で縁をとり」、「二重の虹で紐つけて」と、朝鮮の童謡にある。(Ⅱ26) 但し、朝鮮童謡の場合は、美しいには美しいが、一次認識中、(A)→(B)一面の要素が混入している。中国よりの儒教思想の混在であろう。

(ト)は、北アメリカのヒダツア族に見られる「Cap of the water or rain」。(Ⅱ30私註)

(d)の場合は、その見立て源泉は中国のようで、またかなり特殊なものであり、「白虹貫牛山」(Ⅱ11)を源として、広く「白虹貫日」としてみられる。「牛山・日」を君主に、「白虹」を臣に見立てている。ただし、これは普通いいう(虹)ではなく、「暈 halo」現象中に起こる特異な「太陽柱」現象—貫通現象—(Ⅱ4)の、刀厄にか

かわる形状の見立てである。同内容とは言え、「北虹」Ⅱ「兵乱の象」と次元を異にしている。(Ⅱ20)

(e)の場合は、朝鮮半島の俗信に見られる。(Ⅱ26) (b) バイカル湖辺のアルタイ系ブリヤート族・ヤクート族にみられた「雌狐の小便型」Ⅱ一次認識の(f)の文化的に洗練されたものであろう事は先に述べた。天女自身すでに(雌虹)の末裔である。

(f)の場合は、(d) (b)の形状の見立ての「逆」のものである。例えば「文選」(Ⅱ6) (一)や白楽天の詩(Ⅱ16中)に(虹梁) (梁成虹)などとして見られる。「反り」の形状よりの逆見立てであろう。ただし、反りの具合・風情が主眼で、「反り」の方向は逆である。強いて言えば「反射虹」の形となる。

(g)の場合は、かなり古く、上古中国「南方」の湖南・湖北の文化を担っているといわれる「楚辞」(Ⅱ2)にみられる。(虹旗)も見られるが、これは「天子の旗」である。色は五色であろう。「逆見立て」型である。

その他は、(1) (37)の資料中に散在。特に(21)や語源未詳の(ニジ)語彙中。

占

上古より(虹)は、摩訶不思議な現象として享受され、「占」の世界や俚諺・農諺中においても有力なメンバーの一人であった。そこにおいては、予兆として、妖怪・凶祥観も見られたが、逆に、瑞祥・至福観も見られた。その原因のおおむねについては、A系の一次認識で私見を述べた通りである。しかし、種族の相異と文化の相異によつて二次的にはかなりのヴァリエーションが出てきている。

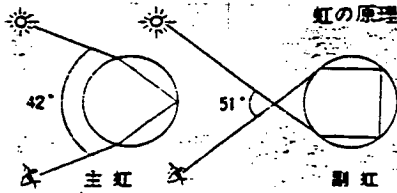


色

「色」の文化的問題に入る前に、少々その光科学的な問題に触れておく。(虹)は、空中の水粒または氷の小結晶に、太陽または月の光があたり、その水粒等が、プリズムのような役割を演じ、反射・屈折・回折・散乱によって生ずる、(屈折率の異なる波長の差異による)いわば光のスペクトルによる無限に連続した色相のグラデーショナルである。それが、

主虹(第一次虹)では波長の 長―短 の順で、上から、  
赤―橙―黄―緑―青―藍―紫

となり、副虹(第二次虹)はその逆となる。一般に可視の(虹)は主虹・副虹だけであるが、理論的にはそれらの反射虹として、無限に現われる可能性は存するのである。これが極く極く稀に可視され



る場合もある。

この(虹)に関する光科学的な問題については、向井正・向井苑生著『反射屈折回折散乱―地人選書2―(昭和22、地人社)中、3「光と水の物語」に詳しい。

さて、「色」の(種類と数の)問題については、資料③私註中(考)の後半部において少々詳しく考察してきた通りであるが、原始時代には、色の問題より、その本質・形態に、より多くその関心は寄せられていたようである。色の区分的享受も未分化であったことである。

とまれ・上掲(虹)資料に、鈴木孝夫著『日本語と外国語』(岩波新書)中の証例でもって補足させていただくと、それぞれの地域の自然的環境や文化の相違によって、

一色 二色 三色 四色 五色 六色 七色

の色数がある。

「二色」は古代中国文献に見られる(白虹)・(白霓)・(白)である。後者はすでに「楚辞」(②)に多出している。前者は、主として「白虹貫日」と熟して用いられるほどのものであるが、これは普通いう(虹)ではなく(量)の一形態であることは先に述べた。また資料④中には、(丹虹)・(黒虹)・(紫虹)等がみられるが、これは、一色というよりは、一色を強調的に押し出したものであろう。「二色」はアフリカのブッシュマン(③注14)に(黄赤)の二色として、「三色」は北欧神話ビフロスト(③)に(色または光の三原色として?)、またアメリカインディアンに(三本の線として③(考)中)に、また西洋古典・ギリシャ語でクセノポンに、「四色」

は西洋古典・ギリシャ語でアリストテレスに、(現代ものにまで拡大すれば、ロシア語原本のスペイン語訳の、子供向けの「虹」と題した詩の本の表紙に描かれた半色の虹の四色(外側から橙、黄、緑、青)に、「五色」は陰陽五行説下の『後漢書』(Ⅱ5)等に(五方正色または五方間色として)、「六色」は西洋古典・ラテン語でマルケッヌスに、(現代ものでは、P. L. Travers 作の『メアリー・ポピンズ』に出てくる「虹」に)「おおむね「藍色」の感受しにくい西欧人に、また「七」の数に聖性を認める文化中、さらにニュートン等科学者による光の分析の業績の発表以降に、多くみられる。資料④(Ⅱエスキモー人の詩の「虹」、同②⑧(Ⅱインドネシアの昔話)、同②⑨(Ⅱアイルランドの昔話)、等)にみられるが、これは原話そのままなのか、訳者による作為が介在しているものかどうか定かではない。同じ数字でも、種族・文化等によって中味も当然違ってくる。色を感じる自然背景も異なるからである。

〈虹〉のカテゴリー

今一般にいう〈虹〉のほかに〈暈〉(幻日)等(Ⅱハロー現象)を含める場合もある。(日暈)〈月暈〉も含めるのである。現代の言葉で「峨眉宝光 Buddhist halo」または「ブロッケン」の虹の輪(妖怪)にも同様であろう。古代中国では更らに〈隣〉Ⅱ立ち昇る気Ⅱ雲気Ⅱ霧気 のごときを含める場合も見られる。資料①には〈雲虹〉〈楚雲虹〉〈氣成虹〉〈蜺雲〉〈雲霓〉〈煙虹〉等々、が見え、隣接的「気」の現象に敷衍して使われている。

### 三 二次的認識

〈虹〉が大自然の中の単なる気象現象の一として素直に認識されるものである。古代的認識から脱脚した現代的認識ともいえる。これはニュートン等科学者の業績より以前にすでに発生し、ニュートン等の時点で理論的に再確認されてきたものである。その目には大むね、オーロラと並んで気象現象中最高に美しいものと映る。しかし、その中に、妖気・エロチズム・兵象・畏怖・不吉・禁忌・凶祥、等一の①感、逆に、夢・希望・ローマン・心躍り・豊穰(豊富)・至福・瑞祥、等一の②感を伴って感じられるとしたら、第一次・二次のものが、その心性・深層心理の中に残存・潜在・混融しているからである。

ここまで、大むね、〈虹〉の享受・認識についてのパターンに主眼を注いで分析してきたが、その方法的始原の特定については、気の遠くなるような大昔のことも含まれるので、軽々に論ずべき問題ではない。しかし、強いていうならば、古代の日本が、いわゆる、トインビーのいう「行きどまり」・「降きだまり」の文化であってグラドキヤニオンの地層の重なりのような歴史の中では、(1)並列発生説、(2)伝播説、この両者を補助学(考古学・歴史学等)の発達をにらみつつ、それに沿って適宜組み合わせ考察していくのがよからう。

①②③が、次なる「虹」と日本文藝を、その〈古代性〉(現代性)の問題と絡めつつ比較文化的に見ていくための「目」となり「物

差し」となろう。

(注1) 神靈視される鱗虫の長。鳳・麟・亀とともに四端の一。よく雲を起し雨を呼ぶという。〔広辞苑〕

(注2) 「仏」(梵語 naga) インド神話で蛇を神格化した人面蛇身の半神。大海や地底に住し、雲雨を自在に支配する力をもつとされる。仏教では古くから仏伝に現れ、また仏法守護の天竜八部衆の一とされた。〔広辞苑〕

(注3) モンゴル人も龍は備翼と考えている。(ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳『シヤーマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』(昭46、三省堂) P.190。

(注4) 「羽衣」は世界的には一応「白鳥乙女」説話と考えられる(Eberhard)。篠田知和基「羽衣説話・ヨーロッパの視点」所収、「開発における文化」平5、名古屋大学大学院国際開発研究科)

(注5) それらしきものは前引「比較研究資料」中にも散見されるが、新資料でいえば、宋の文同の「丹淵集」にもある。

|                    |
|--------------------|
| 辛亥孟秋戊子有虹下天繞飛泉山入    |
| 東谷飲古井良久去作大雨咄之以詩    |
| 長虹落天帳萬丈截群嶺蟠身下深谷類首飲 |
| 古井居人莫之指况復敢引領惜然繞空去雲 |
| 霧變俄頃乾坤爲之黑噴雨極暴猛崩流匯瀉 |
| 瀾巨漲沒四境民田一漂蕩多稼不可省此物 |
| 蓋蟲類聞亦具頭頸淫淫之所生詩傳載爲青 |
| 朝西暮東出輒與日對影夫何此凶孽得使乘 |
| 時逞高風掃寥廓一掃昏穢淨煌煌太陽起墮 |
| 丹淵集 卷十一            |
| 六被光景群陰逐海內此物應遂屏     |

(注6) 混交・混在の例としては、「山東嘉祥武梁祠的漢代石刻有虹寬的

図象。在後石室的第三第四兩石上。兩龍接地。」(11)私註、「断虹飲於宮池」化為男子「俄一彩龍。」(12)夏世隆、資料21—(25) 1、21—(25) 2。並列の例としては5、6中。

(注7) 現代中国文藝にも「五色」は引き継がれている。例えば、『馮至 Feng Zhi 詩集』(秋吉久紀夫訳、1989、土曜美術社) 中「晩春の花園」の最後の連に、

ぼくはもつと涙を落として／ぼくの心の中を湿し、甘露のように、ひとすじの五色の虹が空の彼方に掛かるよう準備していたい。とある。この場合「五色の虹」は吉祥。ただし、恋愛の心に古代を宿す。

(注8) 中国では古くから、宇宙を「五行」(木火土金水)の気のめぐりとしてとらえる考え方をし、五行に方位と色を付与した。つまり、木は「青」、火は「赤」、土は「黄」、金は「白」、水は「黒」。これを五方正色といい、この中間色(緑、碧、紅、紫、瑠璃黄)を五方間色という。(松本宗久著・制作「日本色彩大鑑」《河出書房新社》)

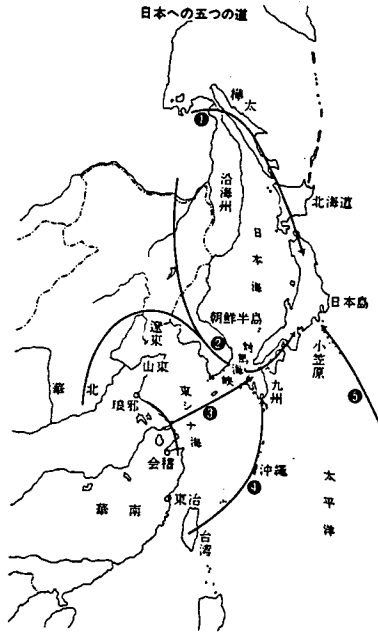
(注9) 鈴木修次著「数の文学」(東京書籍)によると、ヨーロッパ文化の一流流ともいえる「旧約聖書」やユダヤ教の神学では(七)は神聖な絶対数と考えられている。

(注10) 世界における現代語の「虹」に関して、その色の「数」と「種類」については、鈴木孝夫著「日本語と外国語」—岩波新書101—(1960)、岩波書店) 中、第2章「虹は七色か」に、言語社会学的見地からの詳細な考察がある。(遡って「西洋古典語の虹」の節もある)。

(注11) 樋口隆康著「日本人はどこから来たか」—講談社現代新書26—(昭46)によると、「日本はアジアの東端からさらに海へこぼれおちた位置にあつて、まさに「行きどまり」である。外からの諸文化ははいってくるだけで、それから先へは出て行くところがない。

このような「行きどまり」の地域では古い要素のあるものは、いつまでも消えないで残り、新しい要素と重層することがしばしばである。したがって、ちがった根源からちがった時代にはいつてきた多種類の要素が混成して、一体となった文化をつくり出している。

「更にもう一つ、日本海対岸の沿海州から朝鮮半島の東、日本列島へと流れているリマン海流に乗って、シベリア沿海州辺りから、朝鮮半島の東側、日本列島の島根の沖を通り、そして能登半島または佐渡島に到着というルート」（山口博「鹿の歌と鷲の神話—シヤーマン・エコー—」  
 『文学・語学』第一五五号、平9・5） Cf. 22—(3)



(樋口隆康図)

日本はまさに文化のルツボである。  
 この「行きどまり」の日本へはいる道は、四つないし五つが考えられる。一はシベリア、極北から樺太、北海道をへて、東日本にはいる北方ルート、二は朝鮮半島から対馬海峡を渡って、北九州に上陸する朝鮮ルート、三は中国の東海岸からまっすぐに九州へ至る東シナ海ルート、四は台湾、沖縄をへて、南九州へ上陸する沖縄ルート、五は南洋から小笠原島をへて、関東地方へ到達する南洋ルートなどである。」とある。

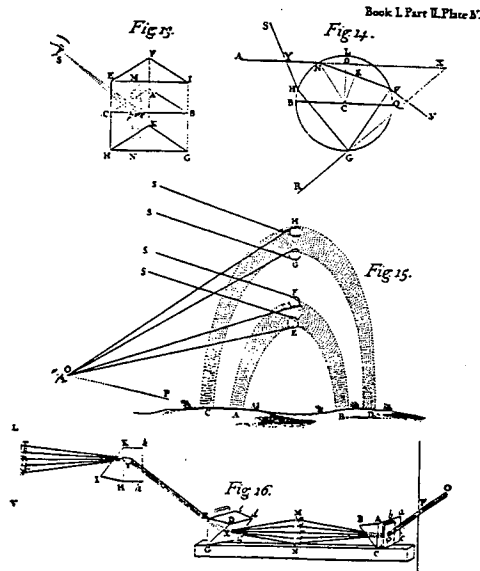


図31 ニュートン『光学』に見られる虹理論。 Fig. 15 に主虹および副虹のでき方と、色の分散がわかりやすく描かれている（ロンドン、1704年初版：金沢工業大学・工学の論文室所蔵本）。

(図A) 前出、向井正・向井苑生著『反射屈折回折散乱』より。